

ビオトープ、たからのもり、  
自然豊かな広い園庭、  
体と心と頭をいっぱいにつかって  
未来を描く



“いま”を生きる

×

“これから”を生きぬく

力を育む保育（4年次）

～幼児期から架け橋期の教育をサステナブルに共創する～



## 研究テーマ “いま” を生きる× “これから” を生きぬく力を育む保育 4年次 ～幼児期から架け橋期の教育課程をサステナブルに共創する～

現在、世界的に幼児教育への関心が高まっています。その背景には、幼児期における教育の効果が明らかにされつつあることがあります。幼児期に「質の高い教育」を受けることは、児童期以降の学力向上にとどまらず、自律性や忍耐力といった「社会情動的スキル」の育成、さらには将来の健康や収入にまで、生涯にわたる肯定的な影響を及ぼすと報告されています。一方で、小学校における学習内容や生活環境の変化に十分に適応できない子どもたちが存在することも、重要な課題として指摘されています。

こうした状況を踏まえ、現在、「幼小接続」のあり方が改めて見直されています。アプローチカリキュラムやスタートカリキュラム、そして「架け橋期」プログラムの検討を柱として、子どもたちが幼稚園から小学校へと円滑に移行し、充実した学びと楽しい学校生活を送ることができる環境づくりが求められています。

そこで本園では、附属小学校との連携を一層強化し、効果的な幼小接続のあり方を探究する取り組みに挑戦いたします。幼児期の「遊びの中にある学び」と小学校での学習との関係について、幼稚園と小学校、双方の視点からその関連性を検討してまいります。

これらの取組は、幼児教育をさらに充実させ、子どもたちの豊かな未来へとつながるものです。この挑戦は、多くの教育関係者の皆様と一歩ずつ、着実に歩みを進めていくことでしか成し遂げることができません。今後とも、共に歩んでいただけましたら幸いです。

滋賀大学教育学部附属幼稚園

園長 奥田 援史

滋賀大学教育学部附属幼稚園は同じ附属小学校・中学校と共に、「いまを生きる」という教育理念を掲げています。私たちは幼稚園という学校教育の始まりの幼児期に遊びや生活といった環境から学ぶ「いま」を大切にしながら、「これから」の持続可能な社会の担い手を育む保育の実践と研究を行っています。

### 1年次 ～多様なステキと向かい合う子供たち～ 研究成果

#### ○ SDGsにつながる幼稚園版アイコンの作成

SDGs17の上位概念である「5つのP」を基に、保育事例から幼児期に大切にしたいことを抽出し、6つのカテゴリに分類した幼稚園版アイコンを作成しました。



#### ○ 事例研究を通して

##### ・ 持続可能な社会につながる力の育成

持続可能な社会の担い手となるために幼児期にどのような資質や能力を育むべきか、そのためにはどのようなことが保育に求められるのか、SDGsにつながる力を幼児の“いま”の生活から見通す保育について考察しました。

##### ・ 幼児期にふさわしい豊かな生活

幼児を持続可能な社会の担い手として育むということについて、6つのアイコンを視点に、“いま”と“これから”を見据えて保育を考察し、幼児期にふさわしい豊かな生活が“これから”を生きる力につながるということを再確認することができました。

## 2年次 ～多様性を生かし共生を実現する教育の探究～ 研究成果

### ○ 「多様性」と「共生」の捉えの再確認と共有

一年次の研究におけるキーワードであった「多様性」と「共生」についての捉えを再確認しました。

幼児一人一人を見つめるにあたっての「多様性」とは、性や人種といった外面的なものだけでなく、価値観や経験、受けてきた教育や考え方などその内面や背景も包括したものであると捉えを確認しました。

**【互いのもっているものを受けとめあい、互いの関わりの中で生かしながら共に主体となって生きる】**  
 ことが「多様性を生かし共生を実現する保育」であると定義しました。

### ○ 教師の働きかけモデルの作成と活用

「多様性を生かし共生を実現する教育」を進める中で、教師が一人一人の多様性を生かし共生に導くための様々な働きかけについて、日ごろから意識的、直接的に行っているものだけでなく、間接的なものや、環境の一つとしての働きかけなども含めて整理しました。



【見守り】【共感】【教導】【受容】

【認める】【協同】【問いかけ】

【関わり・交流】【憧れ・モデル】【暮らしとの出会い】

これら教師の働きかけを言語化し花びらの重なりをモデルに図式化した

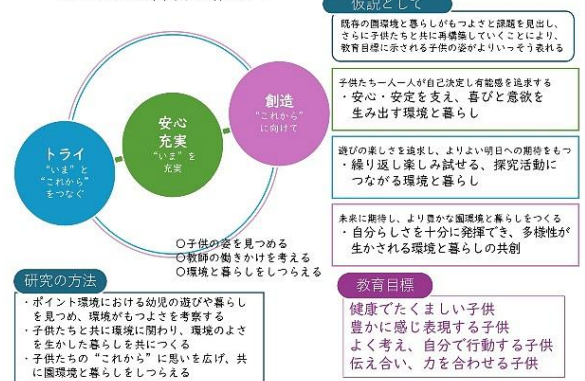
事例研究を通して、教師の多様な働きかけを意識することにより、一人一人に内在する多様を受け止めることにつながりました。そのことにより、子供と教師がさらに自分らしさを発揮し、互いのよさとして受け止め生かしあひながら遊びや暮らしを豊かにしていくものだと考えました。

## 3年次 ～子供たちとの園環境と暮らし～ 研究成果

### ○ 附属幼稚園の最大の特長を生かす

本園の最大の特長である自然豊かな園庭環境のもつよさと課題を理解し、子供たちと共に再構築することによって教育方針に挙げる「目指す子供の姿」を具体的に実現することを目指しました。「園環境」と、そのことから生み出される遊びや暮らしについて、「安心・充実～“いま”を充実」「トライ～“いま”と“これから”をつなぐ」「創造～“これから”に向けて」の視点から探究することによって、園庭環境のポテンシャルを最大限に引き出し、子供たちが安心して、意欲的、主体的に関わる「環境」と「暮らし」をSDGsの視点から見つめなおしました。

“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を育む保育 3年次  
 ～子供たちとの園環境と暮らし～



### ○ 園環境と暮らしのイノベーション

園環境に新たな構想を取り入れ、豊かな自然環境を身近なものにしていきました。また、従来からの暮らしのしつらえにも工夫を取り入れていくことにより、子供たちの自然へ関心や興味はさらに高まりました。事例研究からは「園環境」と「暮らし」を往還させることによって経験や気づきを深め、学びとして遊びや暮らしに生かしていく姿が多く見られました。

### ○ 豊かな自然環境からのアフォーダンス

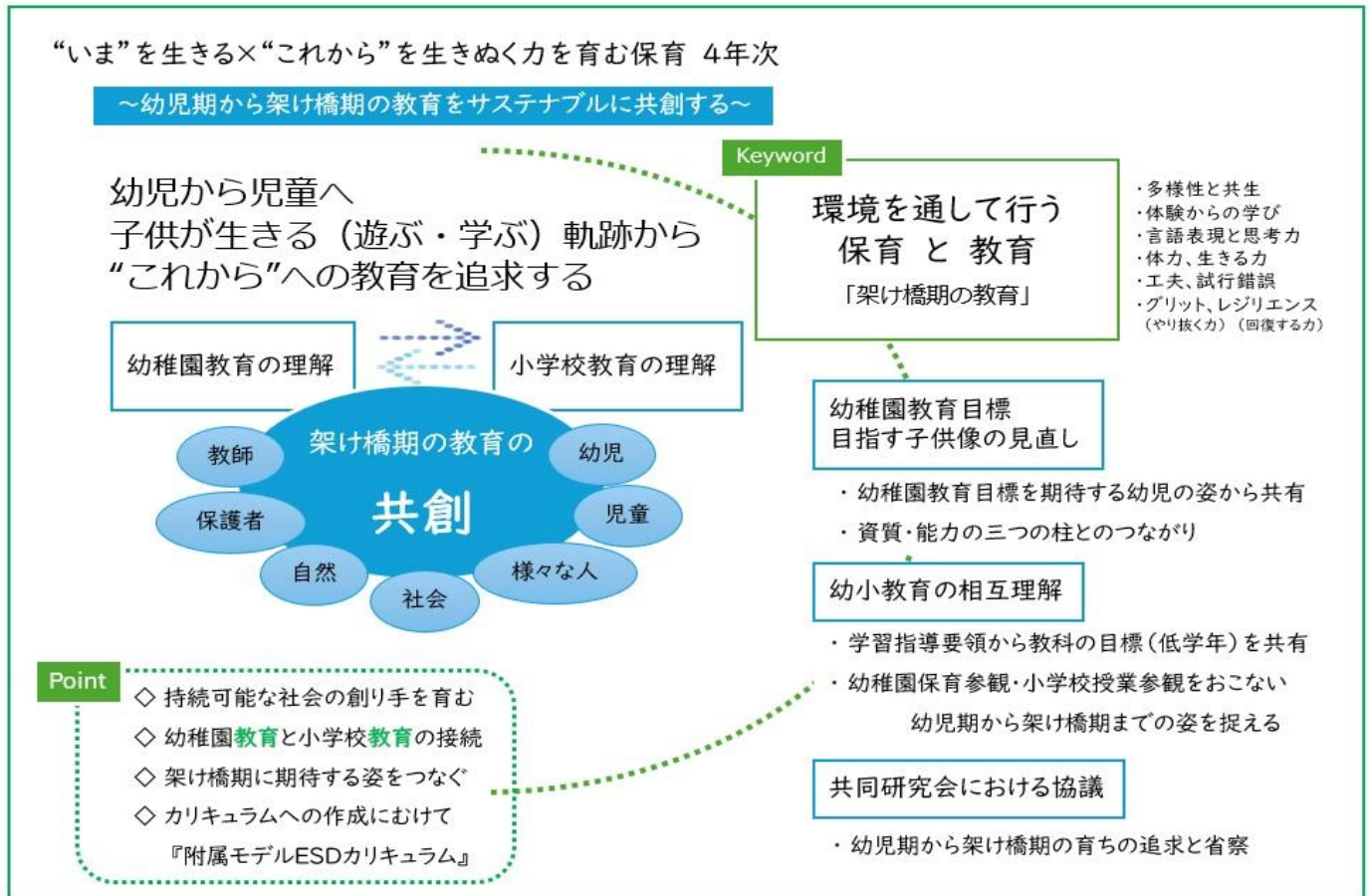
自然環境とのかかわりが豊かになっていくことによって、そこにある「いのち」と関わり、向き合う機会が多くありました。ビオトープなどの環境が遊びや暮らしの一部となり、さまざまに経験を深めていく中で自然の中には自分たちからは見ることができない多くの命があふれ、自分たちもその命と共にあるという認識が子供たちの中に生まれたようです。豊かな自然環境の中のアフォーダンスは、子供たちの“いま”を充実させ“これから”をさらに豊かにするものであると捉えました。子供たちとの園環境と暮らしを見つめなおし、イノベーションを進めることによって、多くの学びを得ることができました。

# 4年次 ～幼児期から架け橋期の教育をサステナブルに共創する～

## ○ めざす子供の姿、育みたい資質・能力について

3年次の研究を振り返り、あらためて“いま”の幼児を取り巻く環境から、めざす幼児の姿を捉えなおすという課題が見えました。附属幼稚園の幼児はそのほとんどが附属小学校へ進学します。そこで、附属学校園において幼児期から架け橋期に育みたい資質・能力について、小学校教諭と共に考察し、附属学校園独自の教育課程「附属モデルESDカリキュラム」の共創をテーマに取組を進めました。

<p>附属幼稚園 教育目標「めざす子供像」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○健康でたくましい子供</li> <li>○豊かに感じ、表現する子供</li> <li>○よく考え、自分で行動する子供</li> <li>○伝え合い、力を合わせる子供</li> </ul>	<p>附属小学校 「めざす子ども像」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自ら学ぼうとし、確かな学力を身につける子ども (学習意欲・基礎学力・思考力・判断力・表現力等)</li> <li>○進んで取り組み、仲間とともにやり遂げる子ども (実行力・行動力・持続力・達成感)</li> <li>○いのちや人権を大切にする子ども (安全・健康・言葉・思いやり・礼儀・物の大切さ)</li> <li>○汗して「つくる」「働く」子ども (実体験・失敗と創造・勤労・鍛錬)</li> </ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



## ○ 幼稚園教育目標からイメージする具体的な姿

附属幼稚園教育目標「めざす子供の姿」から、“いま”架け橋期に育みたい資質・能力を、幼児の姿として具体的に表し、●知識・技能の基礎 ●思考力・表現力・判断力等 ●学びに向かう力・人間性等の視点から整理しました。

【健康でたくましい子供】	【豊かに感じ、表現する子供】	【よく考え、自分で行動する子供】	【伝え合い、力を合わせる子供】
<ul style="list-style-type: none"> <li>●思い切り遊ぶ</li> <li>●自ら楽しくしていく</li> <li>●レジリエンス回復力</li> <li>●ワクワク・夢中</li> <li>●体を十分に使って遊ぶ</li> <li>●規則正しい生活習慣</li> <li>●自分も相手も大切にする</li> <li>●元気・快活 など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の思いを表す</li> <li>●言葉で表す</li> <li>●いろいろなことに気付く</li> <li>●相手の立場を考える</li> <li>●想像力・イメージ豊かに</li> <li>●好きなことを見つける</li> <li>●楽しいことを見つける</li> <li>●自分なりの表現 など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分の思いを伝える</li> <li>●試したりやり直したりする</li> <li>●自分で決める</li> <li>●自分の力に応じてやってみる</li> <li>●いろいろな方法を考える</li> <li>●粘り強くやりきる</li> <li>●知らないことへの問いをもつ</li> <li>●じっくり考える など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人から学ぶ</li> <li>●相手の思いを聞く</li> <li>●折り合いをつける</li> <li>●自分にできることを見つける</li> <li>●自己主張できる</li> <li>●責任をもつ</li> <li>●周りの人の役に立つ</li> <li>●人への信頼・愛情 など</li> </ul>



# 「どっちが目なん？」

友達の姿に思わず自分も動き出した

<3歳児I期5月>

## エピソード

A児は友達がミミズを捕まえているのを見て、「先生ミミズ捕まえて」と教師を誘いに来た。「スコップで土を掘ってみたいんじゃない？」と声をかけたが、自分では捕まえず「先生捕まえて。大きいのが僕のやつ！」と言った。教師がミミズを捕まえ、A児の持っていたバケツに入れると、うれしそうにバケツを持って歩いていた。

最初は全くミミズに触れようとしなかったA児だが、B児が指先でちょっとミミズに触ったときにミミズが縮んだ様子が面白かったのか、A児も触ってみてその動きを楽しんでいた。

しばらくすると「どっちが目なん？」と不思議そうに聞いてきた。教師も「どっちなんやろうな…どっちも同じみたいに見えるもんなあ」と一緒にミミズを見ていると、ミミズが動き出した。その様子を見てA児は「こっちに進んでるからこっちが目なんちゃう」とつぶやき、その後もミミズの動きをじっと見ていた。



## 考察

ミミズに興味をもったA児。最初はただ捕まえて、自分のバケツに入れたいという思いが強かったが、B児の姿、ミミズの動きの面白さに心動かされて思わず触ってみたのではないかと思う。

また、自分のバケツにミミズを入れ、教師と一緒にじっくり見ていたことで、「不思議だな」「知りたいな」という気持ちを持ったのではないだろうか。

### 教育の共創(小学校から) サステナブルな社会に向けて、架け橋期に育みたい力

<B1興味・関心><B1他者から学ぶ力>

小学校でも、新しい体験や経験をたくさんして学習を進めていきます。その中で新しいことに興味・関心を持って乗り越えていくためには、今までの成功体験(試行錯誤した経験)が原動力となり、「やめどころ」から「やってみよう」へ学びが変化していくと感じます。また、その際、友達や周りの人の支えが新たな挑戦への一歩を進めるために大切だと考えます。

幼児期に様々なことに興味をもち、「知りたい」「やってみたい」と思うこと、そしてそれを実現できた経験の積み重ねが、小学校の学習の自分で考えたり、探求したりして学びを深めていく姿につながるのだと思います。A児が「触ってみたい」と思う気持ちから一歩踏み出したのは、B児がミミズに触っているのを見たからだと思いますが、友達の存在が子供の世界を広げてくれるのではないのでしょうか。

# 「食べてる～」

「あげたい」気持ちから「食べられるかな」という気持ちへ

<4歳児II期6月>

## エピソード

ビオトープにオタマジャクシがいることを知った子供たちは、バケツやボウルで捕まえ、自分が捕ったオタマジャクシを満足げに見ていた。捕まえたオタマジャクシを保育室に持ち帰るが、ご飯をあげたりお話をしたりする様子はなかった。

翌日、私はご飯が必要だと感じられるよう、オタマジャクシの絵本と鰾節を用意した。「ばくも」「わたしも」と、子供たちはそれぞれ鰾節を水に入れたが、水面に浮かんだままの鰾節を見て「全然食べない」「食べないのかな？」と心配そうな表情を浮かべていた。私もオタマジャクシが鰾節を食べるにはどうすればいいのか一緒に悩みながら、「どうしたらいいと思う？」と聞くと、A児が「水を少なくしたら上まで行けるよ」と言った。みんなで相談しながら水の量を減らすと鰾節を食べる様子が見られ、「たべてる～」と友達と顔を見合わせてにっこりしていた。



## 考察

たっぷりの水が入った水槽でオタマジャクシが底ばかり動いていることに気づいたA児は、「水の量」と「餌の場所」の関係を考え始めた。じっくり観察しながら「どうしたら食べるか」を考える姿は、自分が餌をあげたいという気持ちからオタマジャクシの立場でどうしたら食べられるかと考えるように変化したのではないだろうか。

### 教育の共創(小学校から) サステナブルな社会に向けて、架け橋期に育みたい力・態度

<B1興味関心><E3想像する力>

2つの物事をつなげて考える思考活動は小学校でも大切にしています。因果関係をはっきりさせなくとも、「AとBは何かつながりがあるのかも」という感覚が小学校での学びを支えていくのだと思います。

子供たちは見たい、知りたい、関わりたいと心が動く想像力を働かせてよりよい方法を考えようとしています。子供たちにはビオトープに住んでいる生き物はビオトープの中で食べものを自分で見つけて生活していることを伝えながら、一緒に生き物の暮らしに想像を巡らせています。身近な生き物との関わりを通して、違う存在を思いやり、自分の行動が他者にどのように影響するのか考えるようになっていこう。

# 「ビオトープのみずはすごいねん」 < 架け橋期 5歳児 I 期 5月 >

見聞きしていたことと、目の前のことがつながった瞬間

## エピソード

ビオトープにカエルが卵を産み、やがてオタマジャクシになった。A児はそれを捕まえると、石や千切れた水草など入れ、飼育ケースをさながらビオトープに設え、毎日保育室で観ていた。

ある日、A児が水替えて飼育ケースにビオトープの水を入れると、水底の藻の中からオタマジャクシと一緒に入ってきた。いたことに2人で驚くと共に、私はA児のとは全く違う大きさに思わず「大きい」と声が出てしまった。その違いを尋ねたが、A児は「わからへん」と応え、せつかなのでみんなで観ることにした。保育室に戻りテレビで大きく映すと、他の子供たちも違いに驚き「え、なんで？」と思議がった。やがてB児が「そや、ビオトープの水はすごいねんて言ってた！」の声に、A児が「あ、ビオトープの水は栄養があるねん！」と思出したように応えた。

そして翌日、A児はあれほど毎日時間があれば観ていた飼育ケースのオタマジャクシを、全てビオトープに戻したのだった。



## 考察

いなくなったと思っていたオタマジャクシがたくさんいてとても驚いたが、A児はどうして大きさが違うかはわからなかったようだ。

しかし、兄のいるB児の「水がすごい」と言う言葉から、「見えないけど栄養がある」という昨年の年長児が言っていた言葉と結びついたようだった。A児の観たい思いはあるものの、全てのオタマジャクシをビオトープに戻した様に、生き物を大切に思う気持ちが溢れていた。

## 教育の共創(小学校から) サステナブルな社会に向けて、架け橋期に育みたい力・態度

< B1他者から学ぶ力 > < E2周囲を大事にする力 >

小学校以降の学びは言葉を頼りに、考えを形成し、思考し、共有していきます。感情が揺さぶられる原体験を幼児期にしているかどうか言葉による学びを支える土台になると思います。

幼児にとって「見えないけれどもそこにある」ということを、ファンタジーの話ではなく現実のこととして認識するのはなかなか大変なことです。しかし見聞きしたことと実体験が重なることで、自分の中で「生きて働く知識」として蓄積されていくのでしょうか。本能的にある「誰かのために力になりたい」思いが素直に現れるこの時期だからこそ、人だけじゃない周囲を大切に思い行動する基盤が、より確かなものとして形成されていきます。

# 「生活科、秋祭りの準備」

秋の自然物を使って作る“モルモットの足”

< 架け橋期 | 年生 | 2月 >

## エピソード

A児は丸めた紙を担任に見せ「モルモット、もうちょっとで完成」と言う。「木とかあるよ」と言われたA児は枝を短く折り、マツボックリの鱗片をねじり取る。モルモットにポンドで鱗片をつけ上からセロハンテープも貼り何度か付け直した後、突然、教室前方へ。そのモルモットをゴミ箱に入れた。戻ってきて材料の入った袋から紙を取り出しマツボックリを包む。そこへ同じチームの二人が来た。A児が「さっきのはちょっとあれすぎたから」と作り直していることを伝えるが二人は何も言わない。A児は紙で包んだマツボックリにペンで顔を描き担任に見せに行く。「紙だけでなく自然物を生かせるように作ってほしい」と言われ考え込むA児。「葉っぱがほしいな」とつぶやき他のチームを見に行く。最後に担任の所へ行き葉っぱの入った箱を教えてもらう。選んだ葉っぱを小さく折ってセロハンテープでくみ、モルモットにつける。「今、足つくってるんだ」と観察者に言う。セロハンテープで何度も貼り直し「よし、やっとできたよ」と言う。



## 考察

A児は繰り返し試しながら自分より小さな生き物の小さな足を表現しようとしていた。7月の生活科の学習でモルモットと触れ合ったことがA児に深い印象を与えたのではないと思う。

教師の声かけにより自然物を使うというねらいに立ち返る姿や、材料を選び直す過程では友達の様子を見る姿があった。友達との会話はあまりなかったが、それは取り組んでいる友達の学習の邪魔をしないように何とか自分で考えようとしているようにも感じられた。

## 教育の共創(小学校から) サステナブルな社会に向けて、架け橋期に育みたい力・態度

< B1他者から学ぶ力 > < B4工夫し、選択しなおす力 >

生活科の学習では、自然と関わる活動を通して、季節の変化に気付いたり、自然物を利用した遊びの面白さに気付いたり工夫してつくりだすことをねらいとしています。A児のチームは秋の自然物で生きものをつくりたい願いを持っていました。A児にとって、他者から学ぶ力や自分の願いに向けて工夫し、選択しなおす力を発揮できる経験を蓄えていくことが、今後の学びを深めるためには大切だと感じました。

秋祭り準備の授業はチームに分かれ各々で進めていく時間で、幼稚園の活動と重なる取り組みでした。A児は自分の作る物に取り組みながら、時おり他チームの様子を見に行くことで、自分のしていることに向き合い直しているようでした。友達の時していること、使っている物から着想を得て自分の考えに取り入れる力が、架け橋期には一層育まれ、子供自身がそのことを自覚して学習に取り組むようになるのではないのでしょうか。



## 附属小学校 | 年生担任より

幼稚園の先生方との共同研究を通して三つの重要な気づきを得ました。

第一に、子どもの見方・考え方についてです。幼稚園の先生方は、一人一人の人生のストーリーを踏まえ、その子の立場や見ている世界を想像しながら丁寧に言葉を紡いでいました。そして、子どもがどこでつまずき、どのように乗り越え、どのように変容していったのかを具体的に捉えていました。これは就学前教育では当然の姿かもしれませんが、小学校教員にとっては新鮮であり、幼小接続を考える上で、その視点を理解する重要性を再認識しました。

第二に、幼稚園教育の在り方から多くを学びました。幼稚園では、子どもの実態に応じて環境が丁寧に整備され、子どもの主体的な活動が自然に生まれるよう工夫されていました。ビオトープやワークスペースなど、教室や黒板といった小学校とは異なる学びの環境が広がり、さらに興味や関心を高める展示の工夫も見られます。こうした環境構成は、小学校教育においても参考にすべき点があると感じました。

第三に、幼小接続の重要性を改めて実感しました。小学校一年生を担当して感じたことは、子供たちが、すでに幼稚園で培った力や経験を有しており、特にスタートカリキュラムの段階では、その力を最大限に発揮できる環境を整えることが重要であるということです。小学校カリキュラムに接続していく上でも幼稚園教育の在り方から学ぶことは多いと考えます。

スタートカリキュラムと聞くと、固定的・静的であらかじめ定められているイメージをもつことがあります。しかし、この研究では、予定調和的に進むものではなく、実態から見方・考え方を柔軟に捉えなおす対話的なプロセスがあり、附属小学校、幼稚園の実態に即した教育の在り方を共に創りあげているように感じました。こうした動的な協働こそが本来の幼小連携の姿であり、年間を通して多くの合同研究に取り組んできた意義であったと考えます。

## 4年次を終えて

### ○ 子供たちにとっての最も近い未来を共に考える

幼児にとって、最も近い“これから”である小学校での学びの様子から事例検討を行う中で、“いま”との「同じ」と「違い」を感じ取ることができました。小学校の授業においても、子供たちは、問いに対して試行錯誤を繰り返しながら向き合い、自分の力量を確かめながら探究していく姿が多く見られました。小学校1年生担任のコメントからも幼稚園での経験や学びがつながり生かされていることを確認することができました。

### ○ 附属学校園で大切にしたい 育みたい資質・能力

事例を通して、幼児期から架け橋期に育みたい資質・能力リストを作成し、編集してきました。めざす子供の姿からイメージし、整理した資質・能力リストにある育みたい資質・能力を、事例をもとに確認、再検討を行いました。共同研究会においても、「公共の場におけるマナー」「社会生活上のルール」など、通園（学）区域が広い附属学校園で大切になると考えられる資質・能力についての提案がありました。また、「数・量」に関することや「言葉・文字・読み書き」に関する資質・能力の基礎となる資質・能力などについても発達の段階に沿って表すことができました。

### ○ 附属独自のESDカリキュラムに向かって

今年度整理し、事例検討などを通して確認、編集してきた「幼児期から架け橋期に育みたい資質・能力リスト」を新たな視点として教育課程に表し、持続可能な形での教育カリキュラムとして位置付けていきたいと考えています。附属幼稚園で育まれた資質・能力が小学校でも発揮されているということを実例から読み取りながら、子供たちの遊びや暮らし、授業における学びのつながりを見据えた“いま”の保育・授業の展開を共創していきたいと考えています。また、幼児教育による効果を明らかにしていくためにも、めざす子供の姿が“これから”を生きぬく力の基盤となっていくということについてもカリキュラムの共創から検証していきたいと考えています。

